優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

# 「思い出のダイニングテーブル」

山北町立山北中学校　３年　石川（いしかわ）　心暖（このん）

最近、私は思う事がある。

「いただきます。」「ごちそうさまでした。」

このような挨拶を、家族全員そろって、あたり前のように交わしていたのは、いつの事だったのだろう。家族の顔をみて、その日にあった何気ない出来事や、日常の会話を、何のためらいもなく、話す事が出来ていたあの日は、遠い記憶の中で色褪せる一方なのだろうか。

父を筆頭に、家族で交わす食卓での会話を久しくしていない事に、違和感と寂寞の思いが募り、一気に私を思い出の空間へ連れ出した。今でも現役である、かつての中心的存在のダイニングテーブルは、今なお、家族一人一人を待っているかのように、寛大な趣を醸し出している。

父と母と、二人の兄と、「同じ場所」で、「同じ時間」に、「同じメニュー」を、このダイニングテーブルで、楽しげに食事を囲んだものだった。「今日ね、学校で先生と、友だちと、ボール遊びしたんだよ。」「給食で、おかわりして、全部クリアしたら、先生に褒められたんだ。」など、その日の出来事を、各自の日記のように、語り合ったものだった。

当時は、「家族」の中心的存在であった、とても大きなこのダイニングテーブルも、今では何となく小さくなったようにも思えるのは、単に私が成長して、大きくなったからだろうか。時間の経過と共に、必要性がなくなり、当時の活気も消えて広すぎるこのテーブルは、実は一番、家族に寄り添ってきてくれた味方だったのかもしれない。幼い頃に付けてしまった傷や、あやまって付けた油性ペンの書き跡も、家族の話題に、一役かってくれていた。

なぜ最近、このダイニングテーブルに集う事がなくなってしまったのだろう。それは、両親の仕事形態、兄たちの学校やアルバイト、私の通塾などで、各自の生活スタイルに年齢が上がるにつれ変わり、多様化した事も背景にあるようだ。

ある日、近年、社会的な問題となっている「孤食化」について、クローズアップしているニュースを観た。「孤食」とは、家族が不在の食卓で望んでいないのに一人で食事をする事で、国民の四人に一人が孤食状態となっている現状だ。原因は、高齢者の一人暮らし、一人親世帯、核家族世帯など世帯構造の変化が背景にある事に加え、家族の生活時間帯が夜型化し、「共食」する事が難しいのだ。

また、孤食には隠れた問題点も多く、もたらす弊害もある。例えば、栄養バランスが崩れる事で、子どもの発育不足や、大人の生活習慣病リスクの増加につながる。とりわけ問題視されているのは、コミュニケーション能力が低くなりやすいという点だ。誰かと会話をする事で、相手の話を聞く力や協調性や社会性が養えなくなるそうだ。

家族と一緒に食事をする事を通し、正しい食事のマナーや、箸の使い方を身に付ける事は、人とのコミュニケーションを基礎にして成り立っているのだ。

驚く事に、孤食同様に社会でフォーカスされている、「日本の子どもたちの貧困」も、問題視されていて、九人に一人が貧困な状態であるのも事実だ。理由は、低所得世帯による家計のひっ迫で、社会に隠れた「貧困の見えない部分」が浮きぼりにされた。

飽食な時代にもかかわらず、当たり前にごはんを食べられない現実があるなんて。そこで立ち上がり、救世主となったのが、「子ども食堂」である。栄養バランスが整った温かい食事と、人とのふれ合いがかなう、地域交流の場として全国に広まっている。

私は、そんな「子ども食堂」の役割や、生きた本質を学んでみたいと思い、近隣の子ども食堂でボランティア活動をさせて頂いた。

その施設は、子ども食堂と介護施設を担っていて、異世代交流に力を注いでいる。子どもの情操教育を育み、親からは得られない知識や経験を得る事が出来たり、高齢者は、子どもとの交流から生きがいや楽しみを感じ得る事が出来たりと、生きた教育を受けられるのだ。

私がボランティアを体験して印象に残った事は、「子ども食堂で共食して、笑って心が元気になってくれたら満足です。」と施設長が笑顔で話してくれた言葉だ。まだまだ認知度が低い子ども食堂を、広範囲に発信するべき課題が残されているが、一つずつクリア出来るよう、私が出来る事で、細く長く関わっていきたいと思った。

子ども食堂のシンボルとなっているその大きなテーブルは、子どもたちが共食によって得られた心の栄養を、明日への頑張るエネルギーに変える温かい食事に、彩りを添えてくれているようだった。

我が家のダイニングテーブルのように。